
ろまんす

沙山はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ろまんす

【Nコード】

N3860L

【作者名】

沙山はるか

【あらすじ】

時代は大正。

基本的に「恋する私の王子様」のキャラクターを基にしていますが、設定は全く違い、キャラクターの特性のみ一致。

年齢差・身分違い・時代の流れに翻弄される二人の純愛。

1. 春風

「いってらっしゃいませ。菜摘さま。」

「じゃあ、いってまいりませう。お兄様には夕刻には戻りますと伝えてね。」

編み上げた革の靴紐をきゅっと結ぶと、返事も聞かずに菜摘は自転車に乗って出掛けていった。

春風をまとい柔らかな空気を皆に運ぶかのように、街の路地をぬって走り抜ける。

そもそも彼女は、商家の娘さんながら学制がしかれてからは、もともと外国語に興味を持っていたものだから大手を振って勉強が出来る！とはしゃいで女学校へ出かける毎日だった。

今日もいつものように両サイドの髪を結い上げて、えび茶色の袴に濃い茶色のブーツをしっかりと履いて、自転車に乗って学校へ向かった。

そして、彼女を見送るのは決まって幼少時から奉公している蓮太郎。元気が良くて、客への愛想も良く働き者の彼だが、算術は苦手のように、直接客相手の仕事を主に任されている。

もちろん幼い時から菜摘の世話と遊び友達としても雇われていたために、どんな時も話し相手になり相談相手になり、身分違いの恋と分かっていても彼女を見つめるその瞳は、周りの大人も同情するほどの眼差しだった。

家は、商家と言っても、昔ながらの街の呉服屋であるが、時代の流れで着物よりも洋服へ移行し、商いとしては明るいものではなかつ

た。

菜摘の兄、あきお暁穂は、いち早く時代の変化を察知して、これからの商売のあり方について悩んでいた。

着物自体を衰退させるつもりはないが、のれんを守るためには如何にしてこの苦境を乗り越えねばならないか、日々考えていた。

両親は、気さくな人柄が周囲の人々から慕われ、あれやこれやと相談役のようなことを担っていた。

商いの方かというと、頭脳派の息子・秋穂にほぼ任せようになっていた。

今まであくせく呉服屋一筋で生きてきたために、少しずつ息子に商い修行として、主になるための「いろは」を教えていったのだった。昨年辺りからは、夫婦で緩やかな時間を過ごしたくなった。など、ことあるごとに周りにもらしていた。

時代は「デモクラシー」と言って、国民が自分達で自分達の政治を行う民主主義を高く掲げて、衆議院議員を選挙するなどして国の政治にも参与するようになっていた。

そして、暗黒の戦争の時代へとひたひたと近付いて行っていた。

いつになく今年の春は冷える。

雨は多いし、雲も多い。

桜も咲いていいものか、よくないのか、蕾を膨らまして迷っているような状況だったりする。

「先生。では、ごきげんよう。」

女学校の門から、それぞれの傍らに自転車を引きながら、3人して軽く会釈をして出てくる。

菜摘・友子・百合。

仲良しの3人は、一応女学校の中ではキチンとしたお嬢様。

門を出れば普通の女の子。興味あるものへとまっしぐら向かう、お嬢様というよりお転婆娘と言うほうが似合っているかもしれない。黒髪をなびかせ、3人は自転車を走らせる。

大きな通りから右に一本脇道に入ると、最近流行りのミルクホールがある。

そこでは、夕方から中性的なシャンソンの歌い手がステージを開く。高貴な葵紫と光沢の白のパンツスーツに、羽のショールをかけて舞台へ上がった。

彼の名は「璃鈴」。

低音から歌いだし、人々の視線を集める。

歌詞は切ないラヴ・バラード。

この時ばかりはお転婆娘もお嬢様に変身して、うっとり聴いている。

ミルクホール専属のピアニスト、拓海の奏でる調べとともに数曲歌い終わると、ゆっくり一礼して舞台を降りる。

余韻に浸りながら3人は夕日を背に受けながら、それぞれ家路につく。

勉学の傍ら、ここに立ち寄るのが最近の流れになっている3人は、専ら璃鈴の事ばかり話している。

外国語が得意の菜摘も、歌詞を訳しては2人に見せて、歌の世界の恋物語を語り合いながら騒いでいる。

「ねえ、菜摘さんは璃鈴さんへの想いはどのくらいかしら？」
自転車を併走しながら百合が振り向きがちに菜摘に聞く。

「そうね、富士山くらいかしら。」

「まあ、その程度ですの？ わたくしは新高山にいたかやまくらいですわ。」

胸を張りながら百合が答える。
そして、空かさず友子が茶化す。

「あはは。200mばかり、菜摘さんの負けね。」

（＊当時の日本の領土で台湾の新高山が一番高い山でした）

「「あはははっ。」」

まあ、箸も転がるだけで笑う年頃の娘と言ったらそれまでなのだけれど、時代が移り変わる中で、どんな風にも考え次第で幸せにも不幸せにもなる。

時代の波に揉まれながら、人間が一つのコマにすぎない扱いを受け、真実が歪められ、彼女たちにもそれが降りかかるのを、この時には未だ微量もそれを知らない。
そう知らなさ過ぎたのかもしれない。

2人に別れを告げて、広小路で菜摘だけが左に曲がり家路を急いだ。
「ーーーーガシャン!!」

栗毛色の馬上には、白い軍服を着た紳士。

自転車ごと倒れこむ菜摘。

その紳士は慌てて颯爽と馬から下りて、散らばる荷物を拾い、自転車を路肩に立たせ、座り込む菜摘に跪き手を差しのべた。

「すまない。怪我はないか。」

2. 蘇芳菊の君

白い軍服

差し延べられた大きな掌

顎に僅かな髭

透き通るような瞳

菜摘の中で、今までにない痺れを感じた。

しかし、この感情を何と呼ぶかなんて知りもしなかったし、知ろうとも感じなかった。

ただその顔にみとれながらも、キチンと一言応えるので精一杯だった。

「だっ 大丈夫です。」

「それは良かった。 けど、時間が経ち具合が悪くなったりすることもある。 そんな時はこちらに連絡するか訪ねてください。 このまま貴女をお送りするべきだが、生憎急ぎの用があるので、ご免。」

そう言うと、彼は胸ポケットから手帳を取り出し、何かをさらさらと書きページを破いた。

菜摘は呆然としながら、その一連の動作を見つめていた。

気が付くと、菜摘の右手を取りたった今破いた紙切れを握らせた。

そのまま彼の左手は右手首を、右手は左手首をそれぞれ軽く握ったかと思うと、すうっと彼女を立ち上がらせた。

見上げる彼女の頭を軽くぽんぽんと撫でながら、はにかんだ笑みを浮かべた。

菜摘の頬は微熱を帯びた。

春のやや高くなった夕日を浴びているからではなく、確実に彼の笑みに呼応してだということは、お互いに分かっていたことだろう。

すると彼は、するりと踵を返して、大人しく主人の様子を見守っていた従順な栗毛色の愛馬に跨ると、菜摘が先ほど走ってきた道を辿るかのように、路地を右に曲がって広小路の方へゆっくりと抜けていった。

彼女の方もその光景を見つめ、彼の後ろ姿を見送った。

しかし、もう既に見えなくなっているのも関わらず、残影を追って立ち尽くしていた。

「くっ、はあっ、くしゅん。」

春の日差しは暖かい。

しかし、日が暮れてしまうとそれも束の間の夢、朝晩はとても冷え込む。

菜摘はぼんやりとしながら自分の部屋で中空を見つめていた。

夕日に映えて栗毛色の毛並みは濃蘇芳色こきすおうのようで、その馬と相反したお色の白い軍服姿のあの方が、瞼の奥に残像が消えないまま夜も遅くなっていた。

あれからどうやって帰り着いたのかも全く覚えていない。

一つ覚えているとしたら、お夕飯の時に汚れた袴のままだったので、母にたしなめられ急いで着替えをしたことくらい。

その後のお夕飯も何を食べたのかすら記憶に残っていない。ただ、心に残るのは蘇芳菊の君のことばかりだった。

（蘇芳菊とは、秋のかさねの色目のうち、濃い赤と白の合せ色目の名）

「菜摘さま、奥様がお呼びです。」

「えっ。蓮太郎ね。分かったわ。お母様にはしばらくしたら行きます。と伝えておいて。」

「かしこまりました。」

ふう。っと深い溜息を一つ、菜摘はついた。

恐らく汚れた袴の原因を聞かれるのは分かっていた。

それと、女学校に通い始めたはいいけれど、早くも卒業後の身の振り方を聞いてくるのはいつもの事。

実のところ母親の所へは行きたくないなあっというのが本心だった。

「菜摘です。お母様。」

「入りなさい。今日は何かあったんじゃないの。」

やっぱり、そうきたか……っと菜摘は思った。

とりあえず、隠すほどの事ではないから、正直に話すしかないわ。っと考え直した。

「すみません。今日いつものように友子さんや百合さんとカフェーに立ち寄り、おしゃべりをしてから帰ってきましたが、皆さんと別れた直後の角を曲がった時に、馬に乗った白い軍服の方と鉢合わせしてしまい、転んでしまいましたの。」

「まあ。それで菜摘さん、怪我はなかったの。今も痛いところはないのですか。」

そう言いながらお母様は膝立ちになり、そのまま歩み寄ってきた。

「大丈夫ですわ。お互いに速度はあまり速くなかったの。

しかも、もし具合が悪くなった時にはここへ。っと連絡先を教えて

下さったもの。」

「そうなのね。でも、カフェーって広小路の”ミルクホール”でしょ。度々っというより時々くらいにして欲しいわね。まあ、しばらくは様子をみましょうね。」

あと、それから菜摘さん。女学校卒業後はどうするつもりなのかしら。いつまでも学問ばかりに熱をあげていても仕方ないでしょ。」

「はい。わたくしは、教師になろうと思っています。」

このような時代だからこそ、色々な感覚を養い、一人ひとりがしっかりと自立できる世の中にならねばならないと思うのです。

女性だからといって、ただ従わねばならないとか、政治や世論の話にも参加できないのは可笑しいと思うのです。

きっと、お父様に話したら怒られてしまうと思うので、お母様だけには本当の事を申し上げましたの。だから、分かってください。」

菜摘の中では、悶々としているだけではイヤ。っという思いが長い間あったので、同じ女性同士である母には必ずや理解してもらえらるだろうと思っていた。

「そう。菜摘さんのお気持ちは良く分かったわ。今日のところはそれしか言えないわ。」

けど、お父様には納得いかない点もあるでしょうから、それは長い時間をかけて解決しなければならぬ課題になりそうね。」

「はい。ありがとうございます、お母様。」

私一人の力ではどうすることも出来かねますが、複数の方からお話をいただくと、未来は明るいと思うのです。現に女教師は全体を3つに分けた内の1つ分くらいは女教師ですよ。」

今まで胸のうちに抱えていたものを母に打ち明けることにより、とても清々しい気持ちになった菜摘だった。

無理もないが、この数日後に起こる惨事など、誰も知る由もなかった。

そして、菜摘と蘇芳菊の君との再会もしかり。

3. 皐月の風吹く時

「行ってくる。留守を頼んだ。何かあれば、すぐに連絡を入れるように。」

「はい。かしこまりました。ご主人様、行ってらっしゃいませ。」

白壁に蔦の絡まる洋館から、帽子を脇に抱えた長身で細身の紳士が出てきた。

ご主人様と呼ばれるには、少し若い気もするが白い軍服姿がよく映える。

彼こそが、海軍に突如抜擢され緻密な軍略を立て静かに期待をされている 蔵前智光少尉 その人だった。

彼は元々天文学を学び、教師になる志をもっていた。

その後恩師からの薦めで海軍士官予備学校へ進むことになる。

さらに、海軍士官学校へ進学し、彼の聡明さは海軍上層部では知らぬ者はいないほどになった。

彼の地学的天文学要素は、海軍としての軍略を立てて遂行することに偉観なく発揮された。

陸での目標物など海洋戦では皆無であるが、彼の打ち出した海図と天文学を合わせた策で、正確さの高い侵攻で夜襲もかけられるという理論を発表したからだ。

士官学校での成績も優秀で、稀代の模範生だった。

その反面、彼の胸のうちでは軍人として認められる事よりも、本来の教師になる夢を捨てきれずに、いたたまれない想いをする時期も

あつた。

その証拠に、元来温厚な性格の智光が荒れて、「何かに憑かれたの
だろうか、人が変わった。」っと周囲の者も徐々に距離をおくよう
になっていた。

そんな彼にみかねて、父親の薦めで二年間ほどイギリスへ留学して
いた時期があつた。

情勢が傾き始めて帰国した後、周囲の説得と時代の空気と流れに逆
らえず、自分の生きる道は海軍で功績を挙げて、この国を支える人
間になることだ。と思うようになっていった。

今日はこれから、その恩師宅に招かれ、近況報告がてら晚餐に同席
する予定なのだ。

紆余曲折はしたものの、この春からは海軍士官学校の師範、平たく
言えば海軍の兵隊を養成する学校の教師に落ち着いた。

もちろん、またひとたび海洋戦が始まれば、いつ前線に赴くよう要
請がくるかは分からないが。とりあえずは、彼の意向を尊重するこ
とと、恐らく、彼自体が国としても大きな財産の一つだったので、
手放したくなかったのだ。

皐月の風は、頬を優しく撫でる様に過ぎる。

最近では、時代が時代だけに身を固める様に周囲から勧められるが、
ずっと男だらけの世界だったので、イマイチ女性に興味がない。
だからといって同性に興味がある訳でもない。

今夜も、近況報告をしたならば、また酒の肴に縁談話をされるので

あろう。憂鬱さが襲い、目を軽くつむり深いため息を一つついた。

ーガシャン

彼は金属のその音で、ハツとした。

視線を下にやると、年頃の若い女学生が自転車ごと道に倒れて、足が絡むように、自転車の下敷きになっていた。

その光景に事の流れを察知して、直ぐさま馬上から降りて駆け寄った。

「いたっ。」

彼女は、顔をしかめながら下敷きになった足をゆっくり引きずりだそうとしていた。

彼は、手を添えて自転車をよけて、路肩へ立てかけた。
散らばる荷物を拾い集め整えた。

そして、跪き手を差しのべ怪我はないか確認した。

「すまない。怪我はないか。」

「だっ 大丈夫です。」

驚きと戸惑いの表情で、彼女は応えたように感じた。

「それは良かった。けど、時間が経ち具合が悪くなったりすることもある。そんな時はこちらに連絡するか訪ねてください。このまま貴女をお送りするべきだが、生憎急ぎの用があるので、ご免。」

胸ポケットから手帳を取り出し、自らの住所だけを書いてページを

破いた。

彼女の右手を取り、その端書きを握らせた。

そのまま自分の左手は右手首を、右手は左手首をそれぞれ軽く握りしめ、すうっと彼女を立ち上がらせた。

不思議そうに見上げる彼女の頭を軽くぽんぽんと撫でながら、少し照れ臭く感じ、はにかんだ笑みを浮かべた。

それと同時に彼女の頬は赤みを帯びたのが分かった。

彼自身、夕日が斜めに差し込んでいたからではないはず。と、もう

一人の自分が横からささやくような気がしていた。

とりあえず道を急ぐように気持ちも体勢も替えた。

大人しく主人の様子を見守っていた従順な栗毛色の愛馬に跨り、路地を右に曲がって広小路の方へゆっくりと抜けていった。

日が暮れると視界が悪くなるのは早い。

少し早めに家を出たはずだったんだが、やっと千石家の門扉の前に着いた。

気配を感じてか、内から扉が開いた。

「いらっしやい。智兄さん。」

「こんばんは。久しぶりだな、拓海。元氣そうだなあ、何か生き生きとしていて、いい目をしているな。」

二人で馬屋に寄ってから、母家に向かいながらしゃべり続けた。

「智兄も、元氣そうだね。しかし、智兄には、なんでも分かっってしまうんだね。顔を合わせたただけなのに、ほとんど見透かされてしまった気がするよ。」

「はははっ。そんな事はないさ、拓海の事は小さい時から見ているから、分かり易いだけさ。」

「そうなのかなあ、まっいいや。それより、最近いい店で働き始めたのさ。智兄も聴きにきて欲しいな。」

ミルクホールで専属ピアニストとして働き始めた事を話した。

そこでは、昼間は給仕として働き、夕方前くらいからピアノを弾いている事なども話した。

そして、その店に足繁く通う3人組の女学生がいる話もした。

4. 地震

春から初夏に移り変わる。

風の暖かさ　吹く向き　におい　蕾の数々　空の色
気がつくところは、いくらでも探せる。

近頃の菜摘は、時々ぼんやりとしている。

友子も百合も、いくら考えてみても原因の見当がつかない。

「ねえ、菜摘さん。今日は久しぶりに、帰りにわたくしの家に遊びにいらっしやいませんか。」
新しい『白樺』を手に入れましたのよ。」

また今日もぼんやりとしている様子に、百合が痺れをきらして誘ってみた。

それに友子も直ぐさま気がついた。

「そうね。百合さんのお家って久しぶりだわあ。　ねえ、菜摘さんもういらっしやるわよね。」

「えっ、ええ、もちろん。で、いつですの、行くのは。」

一事が万事、聞いているようで、聞いていない。
だからといって二人は怒りもせずに、むしろ楽しんでいるようだった。

「あはは。ですから、今日の帰りですわ。一緒にそのまま、わたくしの家にいらっしやいな。」

和洋折衷な煉瓦造りの建物で、白い窓枠が浮き上がるように点在している。

広いお庭には四季折々の樹木と咲き乱れる草花が彼女達の帰りを迎ええた。

「やっぱり璃鈴さんの歌声はいいわよねえ。何度聴いてもうっとりしてしまうわ。」

百合の部屋でくつろぎながら友子が話す。

その間も、菜摘は新しい『白樺』を手に取り、ページをめくっている。

「そうね。でも、あの歌詞に璃鈴さんの歌声だからっていうのもあると思うわ。」

最近の誰かさんは、どうも違う様子ですけどね。」

早速菜摘への百合の問い掛けも虚しく空振りしてしまう。

そんな様子から、3人の中で一番のお姉様タイプの友子が、菜摘の両肩を揺さぶりながら問い掛ける。

「絶対におかしいわ。璃鈴さんの話にも反応しないなんて。」

悩み事があるんじゃないかって？ 話してごらんなさい。」

「そうよ。ここならば誰にも聞かれる事もないわ。」

思っているまま、感じているまま話してみたらいいわ。

あとはわたくし達二人で、必ずいい解決策を見出だして差し上げますわ。」

考えたら即実行タイプで勢いとハツタリだけはいいいお嬢様の百合。この3人、本当にバランスがいいのか悪いのか、性格がバラバラだったりする。

そんなだからだろう。時には、菜摘にとっては2人を姉のように慕い話したり相談している。

「ごめんなさい。数日前から、わたくし自身どうしたらいいのか、どうなってしまうているのか分からないんですの。」

そう話し出すと止まらなくなった。

白い軍服の蘇芳菊の君の事。

彼から渡された端書きを、お守り袋にキッチンとたたんで入れてある事。

ゆっくり一つ一つの場面を辿るように話した。

こんな風に誰か一人の事を考え、思い悩むなんて初めてだったから、二人に相談しようにも出来なくて。

だけど、考えれば考えるほど、悩めば悩むほど自分がどうしたいのか分からなくなってくる。

「何も知らない方なのに、もう二度と会えるかも分からない方なのに。」

気がつくと思ひ延べられた大きな手、はにかんだ笑顔、見送った後ろ姿を思い出して、苦しくて哀しくなるのです。」

「簡単ですわ。その連絡先の住所を調べればいいのよ。お名前くらいなら直ぐに分かるわ。」

それに、具合は悪くないけど、心配しているでしょうから。とか言っ
って顔をお出しになれば、お近づきになれるわよ。」

百合が目を輝かせてニッコリと菜摘に向かって微笑むが、なんだか
楽しげな様子だ。

翌日、授業が半日だった。

「久しぶりに昼食も兼ねてミルクホールに行ってみましょうよ。」

つと友子の発案で、少し昼ご飯には早い時間だったが、3人しているものように自転車で向かった。

実のところ、友子の目当ては夕方の舞台に立つ璃鈴さんだけでなく、普段は給仕をしている拓海だったりする。それは他の二人に直接話していないが、視線や態度でとくに知れてしまっていた。でなければ、こんな早い時間から行く事もない。

曇りガラスがデザインされた木製の重い扉を開ける。

カラカラカラン。っと軽やかな音が、静かな店内に響く。

「いらっしゃいませ。」

爽やかな笑顔とともに拓海が軽く会釈する。

堂々とした百合、控えめに後に続く友子、慌てて追いつくように菜摘が入っていった。

そして、いつもは誰も座らない奥のカウンターに、黒い山高帽を脇に置いて同じ黒の二重マントを椅子にかけ、すらりとした脚を斜めに伸ばして座る客を見て、菜摘は息が止まるかと思った。

「蘇芳菊の君。」

会いたくても、もう会えないかと思っていた彼がいる。そう思うと自然と口をついて出ていた。

前を歩く2人は驚いて、菜摘とその視線の先を見た。

菜摘は、深呼吸をしてゆっくりと近づいてゆき、ぺこりとお辞儀をした。

「先日は、すみませんでした。そっそれから、大丈夫ですから。」

それだけを言うと、またぺこりとお辞儀をして、2人のもとへ小走

りに戻った。

3人で何を食べようか相談したり、ひそひそと話をしていた。つと突然カタカタつと音がしたかと思うと、グラグラグラッと大きく揺れ始めた。

「「「キャアアア」」」

座っていらなくなり、大きな揺れで歩く事も逃げる事も出来ず、3人は驚きと恐怖と不安でうずくまるだけだった。

菜摘は誰かに腕をつかまれ、抱きかかえられた。

気が付くと周りは倒壊した家屋や火事で目を疑う光景だった。

鼻をつく臭い、燃えさかる炎と煙、何がどうなっているかなんて理解できない。

「いやあああ」

「大丈夫だ。落ち着くんだ、なつみ！」

菜摘はハッとした。大きな声を出されたからではなく、蘇芳菊の君に自分の名前を呼ばれたからだ。一瞬で恐怖も不安も消し去ってしまったようだった。

「ど、どうして、私の。」

「すまない、急に大きな声を出してしまって。 あっ、名前、拓海から聞いたんだ。 それより、皆で安全な場所へ移動しよう。 さあ、私に掴まって。」

なるべく落ち着いて、さっきよりも注意して周りを見渡すと、拓海さんは友子を背負うようにしていた。店のマスターが百合を助け出しているところだった。

私は彼に抱えられていた。

4. 地震（後書き）

イメージは関東大震災。ちなみに史実は9月1日。今回は初夏だけど。

そして、拓海は彼女達の会話から、3人のそれぞれの名前くらいは覚えてました。

まさかこんな展開で役に立つなんて……

5. 夜が明けて

逃げ惑う人々 倒壊した家屋

生まれて初めて体験した大きな地震

その後の余震にも煽られて、断続的に襲ってくる不安と恐怖

ミルクホールにて震災にあってから、お店に一番近い、いつもはピアノを弾いている拓海さんのお家に避難した。

大広間のような部屋で、近所の方々であろうたくさんの人達と一緒に時を過ごした。

そんな広い部屋の片隅で私達3人はお互いに励まし合いながら、肩を寄せ合って、うずくまる様に、ただ時が過ぎていくのを待っている。そんな一日を過ごした。

自分の家はどうなったのだろうか。

家族は無事なのだろうか。

これから先はどうなってしまうのか。

考えても答えは見つからないのは分かっていたけど、3人ともきつとずっと同じ事を自問自答していたはず。

しかし、長い沈黙を破れるほど安心する言葉を誰ひとり知らなかった。

震災から一夜が明けて、日が高くなりかけた頃、広間に拓海と蔵前、そして璃鈴がやって来た。

勢いよく広間の障子が開けられると、避難していた者たちは一斉にそちらに目を向けた。

第一声を発したのは蔵前だった。

「皆さん、おはようございます。一先ずはご安心ください。街の火災も鎮静化して、これから復興に向けて動き出すところです。ただ、水の使用が制限されそうです。

状況が変化され次第、逐一正しい情報が入る様にしてあります。もうしばらくこのままお待ち下さい。」

すると男達3人は不安でいっぱいな人々に優しく声かけをしながら、間をぬって彼女達のところへやって来た。

拓海は目の前にしゃがむと直ぐに、小さな薬箱を目の前に出し、何やら広げながらいつもの笑顔で話し出した。

「少しは落ち着きました？　びっくりしたけど、皆さん大事に至らずよかった。

ともこさん、足は大丈夫ですか。傷口の消毒し直しましょう。」

「あつ。ありがとうございます。」

いつもは一番頼りになる友子が、顔を赤らめて礼を言う姿が可愛らしかった。

ゆっくりと左足を差し出しながら、拓海に委ねる感じになった。

その状況を確認したかのように軽く頷いた蔵前は、いつかのように跪き、菜摘の方を見つめながら彼女達に話し始めた。

「夕べは多少休息はとれましたか。心配ではあったんだが、あらゆる所と連絡をとり事態の収拾に務めていたので、遅くなってしまった。すまな……」

「まあまあまあ、渋い顔で硬い話はそれくらいにして、ねっ。君達が助かって本当良かったよ。」

いつも聴きに来てくれてたもんね。ありがとう。」

蔵前の硬い口調に、璃鈴が話を割って入ってきた。

それはステージで客席を魅了させる笑顔や語りとは全く違う、普通の青年の顔だった。

「覚えてくれていたんですか。」

すかさず百合が目を大きく見開いて問い返した。

「ああ。いつも始まる前に真ん中の一番いい席に揃って座っていたからね。」

劇場と違ってミルクホールのステージだから、客席との距離も近いからしつかり顔も覚えていたよ。」

っと百合にウィンクをした。

両手を頬にあて、次は百合が顔を赤らめた。

そうこうしている間に拓海は友子の処置が終わった。

その後、しばらく6人で話をしていた。

不思議な光景だが、まるで以前から知り合いのように話が弾んだ。

菜摘は、昨日から今の今までの出来事が夢なのではないか。と疑いたくなるほどだと思った。

なぜなら、知リたかったことが、自分が思う以上に、スルスルと音をたてて謎解きされていくようだったからだ。

蘇芳菊の君は、蔵前智光さんという、海軍の少尉さんだと分かった。普段は海軍士官学校の師範をされている。

角で鉢合わせしたあの日は、恩師である拓海さんのお父様に会いに、ここ拓海さんのお宅に向かう途中だったらしい。

また、恥ずかしいことに、名前はいつも3人でお互いを名前で呼びながら、楽しくお喋りしているので、拓海さんが覚えてしまってい

たつてこと。

璃鈴さんは、拓海さんの従兄いとこにあたる方で、思いの外好きで始めた歌が更に楽しくて、歌手として少しずつ生活が出来るようになってきたところだとか。

震災にあつて大変な状況であるっていう事を一時忘れてしまう錯覚をするほど、6人にとって安らぐ時間だった。

日が暮れてきた。

調べてもらっていた菜摘達の自宅の状況の知らせが入った。

3人とも家が被害の大小の違いはあるものの、家族は全員無事だということ。

ただ、菜摘の家だけは商家が並ぶ地域のため、火災の火の廻りが早く大きな蔵2棟を残してほぼ全焼に近い状態だと分かった。

呉服屋であるが故、近くで火災が発生したことが分かると、父親と兄が迅速に店の者を動かせて、反物などを蔵や荷車に載せて運び出したという。

その後も蔵や手分けをして避難をし、全員無事だったという。

菜摘の所在を知らせると、とても喜び安心されていたそうだったが、こんな状況で何も出来ずに申し訳ないとおっしゃっていたそう。

翌日、百合も友子も使えの者が迎えに来て帰っていった。

6. 紫陽花

『結局、私には帰る場所はないのだ。』

百合や友子がこの家を去ってから3日目の朝、目覚めると菜摘はなぜかそう確信した。

いつまでも拓海さんのお家でお世話になるわけにもいかない。とにかくここを出て、何とかしなければ。先ずは生活できる環境。街は一生懸命に復興しようとしている。

私みたいな人はいくらでもいるはず、だから前を向いて生きるの。っと気持ちとは正反対に澄み切った空を見上げながら、そんな風に自分自身に言い聞かせるように考えていた。

朝食の後、片付けやお掃除を手伝いながら、拓海の母に、菜摘は自分の出した決意を話した。

「今の時期、大変なのはどこも一緒、若い娘さんが一人街をフラフラと探しあぐねても、何も良い結果など一つも生まれないわ。

ならば、せめて何処に住むか決まってからでも、出てゆくのは遅くはないわよ。

私としては、男ばかりのこの家に菜摘さんが居てくれて、むしろ嬉しいのよ。」

「奥様。ありがとうございます。本当にありがとうございます。」

泣き崩れる菜摘の肩を抱きながら、一つ息をつくと続けて話し出した。

「菜摘さんのお母様とは、実は私がお客として通う前から、同郷のお友達なのよ。」

だから今回のことも、きつと恐い目にあっているはずだから、お店を立て直す間は娘の変化にも気付けないかもしれない。戻ってきて傷を広げるよりは、しばらく落ち着くまで面倒かもしれないけど置いてやってくれないかしら。とお手紙をいただいたの。でも、誤解しないでねだからって訳じゃないの、本当に私としても菜摘さんが居てくれると、この家が潤う感じがして嬉しいの。」

南から湿った空気を含んだ風が通り過ぎる。

季節も時代もゆっくりと動き出しているのに、誰も気付かないのか 気付こうとしないのか。

菜摘が手紙の話を聞いてから2日後、そう震災から一週間過ぎた日の夜。

蔵前は千石家に立ち寄った。

彼は1日おきくらいで様子を見に寄っていた。

もちろんいつもきちんと玄関から入ってくるが、この日は直接庭先からやってきて、菜摘を呼んだ。

「こんばんは。失礼致します。 菜摘さん。 少し話をしたいんだが……いいかな。」

菜摘にとっては未だに身分も違う、自分とは世界の違うお方だと思っていたので、話をするのはおろか傍に近寄ることすら緊張するの

に。
しかも2人つきりで話をするなんて、頭に血が上るかと思ってしまう。

緊張のあまり声にならず、少し口を開きかけたまま頷くことしか出来なかった。

「気分が優れないのですか、顔色が少し良くないように見えるのですが。」

月明かりが、透き通るような菜摘の肌を更に白く浮かび上がらせていた。

縁台に軽く腰掛ける菜摘に、蔵前が一步また一步と近づく。長身の彼が手を伸ばせば指の先が触れるかもしれない、そんな距離に近づいた時に何か慌てるような素振りで菜摘は返事をした。

「い、いえ、ご心配には及びません。大丈夫です。本当に大丈夫ですから。」

「そうですか。ならば良いのですが。」

そこへ蔵前の恩師でもある千石氏がやってきた。

「おお、蔵前君じゃないか。震災の復興には色々と力を尽くしてくれたそうじゃないか。うちの坊主もすっかり世話になったようだしな。」

まあ、アイツものらりくらりしているんだ、いつでも使ってやってくれ。

そうそう、こんな時になんだが、先週の話の返事は決まったかね。君にとっても悪い話じゃないと思うんだがね。」

「先生。そのお話の事で今晚はお邪魔いたしました。まず、菜摘さんを家に招き入れたいと思っています。」

なので、先方には誠に申し訳ありません。とお断り願います。」

蔵前は、何かを決意した強い眼差しで千石氏を見つめ、直立不動で

淡々と話していった。

最後には深々と頭を下げた。

「え？ 君、今なんと言ったかね。それが返事と言うのかね。

菜摘さんも、それならいつまでもウチに居ることなかったじゃないか。」

少々訝しげな顔をした千石氏が菜摘の方を向いた。その先を察した蔵前は弁明した。

菜摘は、何がどうなっているか分からない状態で、口はパクパクと言葉にならないふうで動揺している。

「いえ、先生。じつ実は菜摘さんにはまだお話はしていません。全くの私の一存ですから、彼女には一切の非はありません。」

「なんだと！ 君という男がなんでだね。益々私は分からなくなってきた。

まあいい、分かった。先方には私からそのように断っておこう。じゃあ、私は失礼するよ。」

深い溜息をついて千石氏は奥に入っていった。

蔵前はそれを見送ると、ゆっくりまた菜摘に近づき、しゃがみこんで強い意思を感じる眼で見つめた。

「いきなりで驚きましたよね。ちょうど話をしようとしたところに先生が来てしまったので、順番が逆になってしまった。

しかし、この一週間の間に色々考えた末の結果なんです。

返事は急がないので、しっかり考えてから聞かせて下さい。」

手の行き届いた庭先、立派な枝ぶりの松の下、少し気の早い紫陽
花が全てを見守るように優しく咲いていた。

7. 十六夜

蔵前さんとわたくし……並んで居られるのも不思議なことなのに、信じられない。

けれど、強い意思のこもった真っ直ぐな眼差しと、まるで勢いのある気迫のような空気をまとった佇まい。

菜摘はぼんやりと霞みがかかった十六夜に、あの真剣な眼差しの蔵前の姿を重ね合わせて見つめていた。

時同じくして、月を介して二人は見つめ合っていた。

急な求婚に対して、震える両手を伸ばし、彼の両手を包み込むように手に取って、ただ黙ったままゆっくり頷き、了承したことを伝える仕草が堪らなく愛おしかった。

自宅に戻ると軍服を脱ぎ、部屋着の着物に着替えると、寝しなの酒を片手に夜空を見上げる。

十六夜に、恥じらいと戸惑いの合いまった表情を浮かべた菜摘を重ねていた。

駆け足で過ぎ行く季節

互いの未来と相手の幸福を願い

祈りつつの日々が、1年と半年の月日を費やした。

彼女の卒業を待って、直ぐに二人の祝言を行うこととなった。時は元号も“昭和”と変わって間もなくのことだった。

菜摘 19歳。

智光 27歳。

桜舞う　麗らかな春のある日。
たくさんの人々に囲まれて
たくさんの人々に祝福されて
こんな温かな気持ちのまま、永遠に続けばいいのに……と誰もが願
っていた休日。

晴れた日には　共に朗らかに笑い
雨降る日には　身を寄せ合って
雷が鳴ったなら　大丈夫、怖くはないよ。と囁いて
不安な夜も　肩を抱いて　彼は彼女を守っていた。
そして、嵐はやって来る。

戦禍は広がっていた。
世界でも最強と言われるバルチック艦隊が本国を出発したという知
らせが入る。

蔵前の下にも参戦要請の連絡が届いていた。
しかも、今回は小さいながらも部隊の指揮官としての出兵要請。
手を取り　心を確かめ合って、瞳を潤ませた菜摘を抱き寄せて、し
っかりとした口調で諭すように語りかけた。

「遅くも早くも、必ずこのような時はやって来た。
大丈夫、私が大丈夫と言うのだから、絶対に大丈夫だ。君を一人に
なんかさせません。
淋しくなったなら、空を見上げなさい。
君の见ている空は、私に続いている。
きっとその時には私も同じ太陽　同じ月　同じ星空　同じ雨雲を見
上げているから。」

そう言って戦艦に乗り込んで行った。

初めて逢ったあの日と同じように、いつまでも見送っていた。

二人の想いとは裏腹に戦禍は激しさを増していった。

誰もが口には出さずとも最悪な状況にあったある日

智光は、ふと夜空を見上げ憂いを浮かべた表情で、しばらく見上げていた。

君も見上げているだろうか、この星空を。

星がたくさん輝く夜には、私を取り巻く総てを投げ出して、君に逢いにゆきたくなる。

君が居てくれたら、他は何も要らないのに。

そして、胸ポケットから手帳を取り出すと、無造作に破かれたページのところに挟まる菜摘の写真を見つめた。

8. 知らせ

菜摘は、女学校を卒業後、母校で教師になるための勉強を続けていた。

智光が戦地に赴いてから、それは更に熱がこもる様になっていった。山茶花が咲き出した頃、来春からの採用試験の話をいただいて、挑戦することに決めた。

菜摘にとつては、長い間抱き続けてきた夢への切符なのだから尚の事だった。

そんな勉強に励んでいた毎日だったある日の午後
玄関先で騒々しいやり取りがあるようだった。

何事かと思つて向かつてみれば、かなり薄汚れてはいるが、白い軍服の男が家の者と言いつ合っていた。

「何事ですか。」

菜摘は大きな声を出して、場を静止させた。

そして、薄汚れた男は菜摘を見ると、皆に抑えられたまま声を懸命にあげた。

「あなたは、蔵前夫人ですね。」

自分は、蔵前少尉指揮官の下で前線にでておりました、山下といいます。」

「皆さん、放してあげて下さい。」

それから山下さん、話を聞きましょう。ですから大きな声でなく、普通にゆっくり落ち着いて下さい。」

そう言い終えると、皆は手を放して、まだ遠巻きに囲んでいるが、

少し下がっていった。

「ありがとうございます。

大切なことを先にお伝えします。

蔵前夫人、気をしっかりと持って聞いてください。」

その言葉で、菜摘は山下の言わんとすることを察した。

「やめて！ ごめんなさい、山下さん。もう分かったわ。ご苦労様でした。

今日のところは、ここ私どもの家でお休みください。今、仕度をさせますから。私はこれで失礼しますわ。」

そう言葉を早めて言い残すと奥へ下がっていった。

奥の自室に戻り、太陽がやや傾き始めた西の空を見上げてみた。

不思議なことに、菜摘には嘘のように感じられた。

山下の言葉や彼が信じられないのではない。

むしろ、あの気迫や気の乱れ様は演技ではなくて、本当だと思う。

だから、あの時は反射的に彼の言葉を遮ってまでして、あのような対応をしてしまったのだ。

しかし、今もこの暮れゆく西の空を見ている気がしてならないのだ。吹く風も、暮れてゆく空も、赤々と空に映える沈み始めた太陽も、どれを見ても感じて、菜摘の胸にはしっかりと智光を感じられるのだった。

しかし、周りはそんな風に感じても考えてもくれない。無理もない、山下の話によると、こんな風だったそうだ。

――月もなく夜もかなり更けた、ある晩。

季節風が強く吹き、海上は ややシケていた。

蔵前少尉は、作戦決行の命を出しました。

緻密で見事な計画でしたので、進行方向も寸分狂わず計画通りに進み
的確な無駄のない人数と指示で夜襲計画は大成功を納めました。

ひと先ず、状況を我が国に伝令を送り、事態の收拾など行っていま
した。

その時、捕虜として収容していた者の一人が居なくなったのです。
脱走を謀った。っと皆思いました。

艦艇ですから陸地からはかなり離れた沖合に停泊していました。

ですから、小船を出して搜索しても無駄と判断し、艦内を嚴重に調
べました。

もちろん蔵前少尉は責任感のとても強い方ですから、自ら先導をき
って調査をしておられました。

その時、どのように仕掛けたのか不明ですが、爆発が相次いで起こ
りました。

その爆破により、艦隊の一艇が捕虜も含む多くの者と共に失われま
した。

残る副指揮官の指示の下、我々は帰還出来たのでございます。

帰還後、その足でこちらへ参った次第です。――

その後、正式な文書で事に及んだ内容が簡略的な文言で軍部より届
いた。

きらびやかな勲章と共に。

それでも智光を待つ菜摘には、周囲も同情の目を向けていた。

形だけの葬儀でも、涙も流さず人形のように虚ろな目の菜摘の姿が、皆の涙を誘った。

菜摘は座りながらも頭に浮かぶのは、どうして皆泣いているの。こんな嘘の式なんてやっても彼は必ず帰ってくるのに。そんな言葉ばかりだった。

しかし、年も明けて松も取れる頃には、次第にそれも少なくなっていくった。

しばらくして、恩師からの連絡で、来春より隣町の小学校で採用が決まった。というものだった。

もちろん彼女の希望も汲んでくれており、その小学校で経験を積んでから母校へ移るということだった。

その頃になると、骨の納められてない形式の墓前に足を運ぶ姿が見られていた。

最終話。流星群

桜が舞い　小鳥がさえずり　新しい環境で再出発した菜摘。
誰から見ても、何に対しても一途で一所懸命に向かい合い、気丈に
振る舞う彼女が痛々しかった。

週末は必ず墓前に足を運ぶ。

一週間の出来事やこれからの事、目にするもの耳にするもの生活の
全てを語りかけていた。

しかし、その瞳は、かつての輝きを失っていた。

幾度流したであろう涙の数だけ、輝きに膜を張るように少しずつ少
しずつ曇らせてしまったのだろう。

今日も爽やかな風の吹く中、菜摘は墓前にやってきた。

庭に咲いたばかりの鮮やかな芍薬を2、3本切って持ってきた。

空を見上げ、吹く風に髪をなびかせたまま、石で出来た囲いの端に
横向きに腰掛けていた。

そして、立派に彫られた名前のあたりを見るように、斜め前に首を
かしげ見上げながら、まるでそこに彼が居るかのように、また今日
も話し始めた。

「今日の風は気持ちいいわね。踊りたくなるようだわ。

こんな日は、小さい子は風に向かって走っていくのよ。

何が楽しいのかは分からないけど、全身で風を受けながら両手を拡
げて楽しそうに走り回るの。

彼らは風の中に何か楽しいものが見えるのかしらね。

そう、智光さんと初めて逢ったのもこんな春の日の夕暮れだったわ
よね。

私には王子様が現われたかと思いましたわ。

あの時は、まさかこんな風になるなんて思いもよらなかったわよね。

そう、まさか 私一人ぼっちになるなんて……ひどい わ。」

独りでに溢れ出る涙を止められなかった。

誰も居ないここだけが、唯一彼女が思い切り泣ける場所だったのか
もしれない。

『もう、私のお墓の前で 泣かなくてもいいのですよ。』

菜摘はハッとして顔を上げた。

その時、斜め後ろからがっしりと抱かれた。

うなじに、首筋に、耳元に、優しくて柔らかい感触を覚えた。

そして、その感触は耳元から滑るように頬へ、唇へ。

「すっかり遅くなってしまったな。

こんなにも君に淋しい想いをさせてしまつて、すまなかった。

でも、もう大丈夫だ。ずっと、ずっと一緒に。もう二度と離れない
し離さない。菜摘。」

「と とも、 みつ、 さん。」

うつ うわああああん

心の中の半分では、まだ生きている。絶対に帰ってくる。と信じて
いながらも、どうしても現実を受け入れられないだけなんじゃない
かと思う自分もいたため、号泣する菜摘。

それをしっかりと支えるかのように抱きしめる智光。

彼が戦地に赴いてから今までの1年半の間、逢いたかった気持ちと
不安だった気持ちが飽和状態まで達していた。

だけど、それを押し殺して生きてきた。

それがいま涙となって全て流れ出ているようだった。

どのくらいこのまままでいただろう。

1時間くらいは裕に超していただろう。

その間もずっと石の囲いに腰掛けたまま智光はしっかりと菜摘を抱きかかえ、彼女の頭に頬を寄せ、時折優しく頭を撫でていた。

菜摘も、彼の温もりを感じ、だんだん落ち着いていった。

そして懐かしの我が家に戻って、ゆっくりとして、還りつくまでの経過を話した。

当時は正確な情報が入りにくい状況だったために10年経ってひよっこり帰ってくる者もいた。

智光の場合も爆破されて、沈んでゆく戦艦を目の前で見れば山下の様に思っても無理もない。

現に、この時も助かったのは僅かな者だけだった。

艦内での爆破が起こった時、現場のすぐ近くではなかったみたいだが、吹き飛ばされた。

揺れる戦艦、動揺し逃げ惑う兵士達、相次ぐ爆破によって沈没してゆく、その全てに対する恐怖。

気を失い漂い流され着いたのが、運よく東北の外れにある小さな漁村の浜だった。

気がつくくと、老夫婦が看病してくれていた。

村の者に大変世話になり、近くの大きな街まで馬で送っていただいた。

役場より軍部に取り次いでもらい、色々大変だったが、ようやくこ

の街まで還って来る事が出来たって感じだ。

宵に窓辺に佇む二人、瞬く星空を見上げながら菜摘は、長い長い間待ち続けていた時の事を話した。

時々心がくじけそうになりながらも、あの日教えてもらった通りに空を見上げていた事を。

吹く風を感じ

輝く太陽に祈り

流れる雲に想いを託し

満ちる月に面影を映し

香る花々に囁き

着物を抱き眠る

「智光さん。もう二度と戦地に向かう事はない。って言うてくださったけど、本当なの？」

「ああ。本当だ。ずっと一緒だ。ただ……。」
珍しく智光は言葉を濁した。

「ただ、どうかなさったんですか。」

「ただ私は、恐らくあの日飛ばされた時にだと思いが、左の聴力を失ってしまった。」

彼には珍しい脆弱さを剥き出しにした状態で告白した。

しかし、菜摘はそんな彼に向き合い微笑みながら言うのだった。

「大丈夫ですわ、智光さんの右側が私の指定席って決まりましたか

ら。

それに、元々憧れていた教師という仕事だけをしてゆけるんですし、私達二人とも教師になれたんですもの、幸せな事ですわ。」

「菜摘。ありがとう。」

そうだな。私達が共に寄り添い生きてゆける。この幸せな現実さえあれば大丈夫なんだな。」

やっとこれからが本当の二人での歩む道なのだと確信が持てた時、空から二人へ贈り物。

空を仰ぐ二人に降り注ぐように流れる星達。

「わぁ、智光さん。星が、星が。」

「ああ。そんな時期だったな、色々ありすぎて忘れていたよ。しかし、間に合ってよかった。君と二人で見ることが出来て良かった。菜摘、これがいつか君に話した、こと座流星群だよ。」

最終話 流星群（後書き）

本編は最終話ですが、オマケの話も入れたので、完結設定にはしてません。

今回は流れが早くて、あっという間の最終話ですが。楽しんでいただけたら嬉しく思います。

宜しかったら感想などお聞かせ願えたら今後の励みになります。

＋a. 赤い糸＜前編＞（前書き）

本編の智光と菜摘の物語とは別に、伏線として拓海と友子のお話です。予定では前・後編の2話完結です。

＋a. 赤い糸＜前編＞

千石拓海。

千石家に生まれ、大事に育てられた。

わがままの度は過ぎないが、人生やりたい様に生きる。っていう感じ。

学校には通うが、野球に没頭していた。

そんな中、戦中でルールにも国が口を出して来たりで、どうもしつくりとこない。

思春期でもあったのだろう彼はイライラを周りに当たり散らしていた。

そんなある日。

母親に罵声を浴びせ、父親とやり合って、むしゃくしゃして家を飛び出した。

ちょうど近況報告をしにやってきた蔵前と玄関先であった。

「やあ、拓海。相変わらず元気が良すぎるみたいだな。」

「うるせー。」

そう言って蔵前の脇を過ぎようとした時、ガシッと腕を掴まれた。

「いてーなあ。何すんだよ。」

「挨拶も出来ない人間になったのか、拓海は。」

真剣な目で蔵前は拓海を玄関先の外壁に押さえ込んだ。

「放せよ。何もしてねーのになんで手え出すんだよ。」

「何もしなさ過ぎだからだ。そして、人間として善くない態度だからだ。」

蔵前は腕の力は抜かず、真っ直ぐに拓海を見据える。

押さえ付けられたまま、拓海も蔵前の眼を真っ直ぐに敵意剥き出しで睨む。

そして、そんな蔵前を嘲笑うように口元だけ歪ませた。

嘲笑うような口元と共に拓海の眼光の鋭さがやや薄れ、蔵前の手の力が微かに緩んだ。

その瞬間を狙って蔵前の腕から抜け出した。

飄々とした態度で、クルッと周りながらニヤリと笑って言った。

「なんかシラけるね。相変わらず智兄は真面目で熱いよ。そんな風だと疲れない？」

「もっと楽しく生きようよ。こんな時代なんだからさ。」

度々尋ねて来る蔵前を、家族でも友達でもない、少し年の離れた兄の様に慕い育った拓海。

彼の存在があったから、野球を止めても音楽の道で進み、彼らしく生きるようになったのかもしれない。

時代的に17・8歳と言ったら、いつ赤紙が来てもおかしくない。もしくは、そろそろ定職に就いてもいいはずだった。

それは本人にもイヤってほど分かっていた。

だからこそ、自分で職だって見つけてきた。

いつも立ち寄るミルクホールの給仕。そう、ウェイターだった。

春、生暖かい風が吹く。拓海は夕方前に一段落つくと、外回りを掃き掃除する。

気分が良く客が少ない日は早めにピアノを弾き始める。

それは気になる彼女の為に。

彼女とは給仕と客の関係以外何者でもなかったけど、彼女の友達同士の会話を耳にしながら、胸のうちは彼女への気持ち一色になっていた。

彼女の名は、『友子』。

女学校で2年生。

拓海のいところで、このホールでステージも開いている『朝霞璃鈴』に憧れて、友達同士で足しげく通って来てくれている。

しっかり者で、優しくて、化学が好き。

甘いもの と 珈琲が好き。

猫を飼っているらしい。

拓海の知っているのは、せいぜいこのくらい。まあ、それも頑張った話のタイミングをはかり珈琲などを運んで行った賜物だ。

高木友子。

地域の地主の家、高木家の長女として生まれる。

3つ違いの兄がいる。

兄は工機部（のちの国鉄、今のJR）に勤めていたので、最近はまだり顔も合わせないほど、時間帯が違う生活になっていた。

女学校1年生の冬。

広い広い空き地に大きな工場が出来た。

飛行機の部品を作る工場で、稼働は春からだ。と父親と近所の大人が話しているのを、たまたま聞いてしまった。

その冬のある日の帰り道。

3人して探険してみない？　　っと好奇心たっぷりで意気投合して、大きな工場内の高く高くそびえ立つ煙突の元に潜り込んでみた。もちろん何も無い。ただただホールのような丸くて広い空間が広がっている。

いずれここに排煙が送り込まれるであろう集まってくる排気管からの排気口が頭上に幾つもある。

その更に先には小さく丸く切り取られた空が満月のように見える。

百合はお嬢様なので、工場すら初めて入った。

ましてや煙突に潜り込むなんて、ワクワクしてドキドキして異世界に入ってしまったくらいの冒険だった。

友子自身は、小さい頃は兄にくつついて外を走り回っていたので、少しくらいの冒険は大した事ではなかった。

だけど、やはり野原を駆け回るのは違う。大人たちにナイショで潜り込んだってというのが秘密裏めいていて興奮させた。

菜摘は、暗くはないが、ちょっとのお転婆と読書を好んでいた。友達同士で入ったそこは、まるで冒険小説の主人公の一人にでもなった気分だった。何も宝はないのは分かっていたけど。

ひんやりした空気と春の午後なのに薄暗いここは、洞窟の中のようにも感じる。

3人して煙突の元に入ると秘密基地みたいな気分だった。

ドキドキが治まらず、一先ずミルクホールでお茶をいただいて落ちて着いてから帰る事にした。

テーブルに着くと早速、目をキラキラさせた百合が話し出した。

「今日は本当に面白かったですわねえ。わたくし一生の思い出になりそうよ。」

「百合さん、先陣きって特攻隊みたいで勇ましかったわ。でも、今までにない興奮に駆られたって感じね。」

固く絞った手拭いで、汚れた袴を叩きこすりキレイにしながら友子が言った。

そんな彼女を心配そうに見つめながら菜摘が聞いた。

「友子さん大丈夫、汚れ落ちそう？ でも、近くで見るアレはホントに高かったわよね。空がポツンとお月様みたいだったもの。」

彼女達の様子を見て、拓海はいつもより1本多めにお手拭を用意して、テーブルに持っていた。

「良かったら、こちらをお使いください。温かい濡れ布巾の方が良く落ちますから。」

「あっ、ありがとうございます。すみません。」

しゃがみ込んで拓海は友子に布巾を直接手渡した。

そして、軽く指先が触れ合った。

「「あっ」」

この時が最初にお互いを意識した瞬間だったのかもしれない。

＋β. 赤い糸＜後編＞

拓海は微かに触れた冬のあの日以来、今までに感じた事のない温かい気持ちがある事にある事気がついた。

友子達が店にやって来るとそわそわとして、気になって仕方がない。

今までがむしろに生きてきた自分自身とは違う時の流れを感じた。そして彼女達の視線の先には璃鈴がいる。

変な嫉妬心が芽生えているのも感じ、些細なことで璃鈴と喧嘩もした。

智兄とは違った角度で物事を見て、幾つかの案を提示してくれる。拓海にとって、智兄と璃鈴は身近な人間の中では一番の理解者達だった。

ある朝、妙胸騒ぎで目覚めた。

しかし何事もなく朝の仕度を済ませ、新聞を読んだりしていた。だけど新聞記事は頭に残らない。

きっとそれは数日前に智兄が家に食事に来た時の意外な言葉だったのかも知れない。

「拓海も、ちゃんと一人前になる努力をしているみたいだな。

これもその娘さんのおかげだな。

これからの相談役は彼女に任せて、私にもそんな人が見つかるように、拓海に習って探さないと。」

その瞬間は何も感じなかったが、智兄が帰ってからその言葉と彼女の笑顔で頭の中がいっぱいになって、数日経った今も離れないでいる。

それにしても今日は妙な胸騒ぎがする。

——カラン♪カラン♪——

木枠の扉が開いて、長身の客が入って来た。

「いらっしやいませ。って、智兄じゃないか！ありがとうございます、早速来てくれたんだね。」

「おいおい、私は今日は客で来たんだ。キチンとした接客をしなければダメじゃないか。」

笑みを浮かべながら拓海に話しかけた。

言われた通りに拓海はビシツとして、椅子を引きエスコートした。

「いや、今日はあちらのカウンターに座らせてもらうよ。じゃあ、上着を頼む。」

拓海に黒い外套と帽子を手渡すと、白い軍服の彼はカツカツと黒いブーツで大きめな歩幅でカウンター席に向かい、静かに腰を掛けた。だが、斜めに伸ばした脚は更に長い脚を強調してしまい、つい目がいつてしまう。

拓海は蔵前の座った隣の席に、外套と帽子をそっと丁寧に置いた。すると今度は流れるような手つきで硝子のグラスへ氷と冷たい水を注ぎ入れて、手拭きと共に蔵前の右手脇へそれらを置いた。

——カラン♪カラン♪——

また木枠の扉が開いて、今度は軽やかな笑い声とともに彼女たち3人が入って来た。

「いらっしやいませ。」

爽やかな笑顔とともに拓海が軽く会釈する。

堂々とした百合、控えめに後続く友子、慌てて追いつくように菜摘が入って来た。

そして、空かさず蔵前は空気を感じて拓海に囁いた。

「2番目だな。」

もちろん慌てた拓海は、その拍子に注文用紙を床に落としてしまった。

フフフツと笑いを堪えた蔵前は違う感覚に襲われて固まった。最後に慌てて入って来た彼女が真っ直ぐに自分の方へと歩いてきた。

「先日は、すみませんでした。 そっそれから、大丈夫ですから。」

そういうとペコリとお辞儀をして友達の待つ席へと戻っていった。

その後ろ姿を見つめる蔵前の視線をとらえた拓海は、さっきの仕返しとばかりにニヤニヤしながら蔵前に囁く。

「彼女の名は、なつみちゃんって言うんだよ。智光兄さん。」

「拓海。大人をからかうもんじゃないぞ！　　と言いたところだが、今日の所は礼を言う。実は先日お前の家に向かう途中に彼女に出逢ったんだが、例えがたい何ともいえぬ感情に冒されているようなのだ。」

「なるほどね。あんまり嬉しくないけど、俺と智兄は同じ病って訳だな。」

っと突然カタカタっと音がしたかと思うと、グラグラグラッと大き

く揺れ始めた。

「「「キャアアア」」」

彼女達の恐怖に怯えた叫び声が店内に広がる。

座っていられなくなり、大きな揺れで歩く事も逃げる事も出来ず、彼女達3人は驚きと恐怖と不安でうずくまるだけだった。

暫くの間。そうどのくらい経ったかは分からないが、蔵前が倒壊した店の瓦礫から這い出た。

その脇から唸り声とともに瓦礫を払って拓海が出ようとしていた。その手を蔵前が掴み引き上げた。

後ろの方ではマスターが助けを呼ぶ声を発していた。拓海は駆け寄り手助けした。

その間、蔵前は彼女達がいるであろう辺りを探し続けた。女学生の袴がチラリと見えた。

「おい！ 拓海、早く！ 手を貸してくれないか！」

男3人で瓦礫を一つ一つ取り除いていった。

彼女達は気を失っているようで、呼びかけに誰も反応しない。次第に嫌な想像を脳をよぎる。

「ともこさん。ともこさん！ 返事をしてください！ 今助けますからしっかりしてください！」

友子は誰かに名前を呼ばれているのは分かった。しかし、燃えるように左足が熱かった。

視界は真っ暗で、何かの下敷きになっていた。

少しずつ押し掛かる重圧から開放されてゆくのが分かった。
そして、力強い掛け声とともに引き出された。

気が付くと周りは倒壊した家屋や火事で目を疑う光景だった。

鼻をつく臭い、燃えさかる炎と煙、何がどうなっているかなんて理解できない。

声に、言葉にならない景色に、ガクガクと震えていた。

その間も手際よく拓海は瓦礫に友子を座らせると、自分のシャツの片袖を引きちぎり、友子の左足の傷の手当をしていた。

現実を把握出来ないとはこんなことだと思う。一種の錯乱状態なのだろうか、声も出せず身体を動かすことも出来ずにいると、近くから悲鳴が聞こえてハッと我に返った。

「いやあああ」

「大丈夫だ。落ち着くんだ、なつみ！」

頭の片隅であれば、菜摘？　そして、蘇芳の君なの？　じゃあもしかしてこの人は彼？

「あつ、ありがとう、ご、ざい、ます。　あ、あなた、は。」

そうだ、名前。彼の名前を知らないんだわ。私は、私はどうしたらいいの。

「よし、出来ました。あつ俺、拓海です。俺んち近いですから、とにかく避難しましょう。」

そう言いながら拓海は友子をさらっと背中に負ぶった。

決して大柄とはいえない彼なのに、鍛え上げられた腕や肩、何もかもが驚く事ばかりの友子だった。

視界の端ではマスターが百合を助け出しているところで、反対側を見遣ると蘇芳の君に抱きかかえられる菜摘。

安心した友子は拓海に身体をそっと委ねて、信じられない現実が覚

めぬ様に目を閉じた。

この広い背中と温もり、しっかりと腕に支えられながら、淡いほのかな想いを必死に悟られまいと彼の背中で身を縮めていた。そんな彼女をしっかりと支えてゆきたいと想いながら拓海は、高鳴る鼓動が背中から伝わらないかドキドキしていた。

『ずっとこのままでもいいのに……』

そうお互いに想っていた事を、この時の二人はまだ知らない。

＋β. 赤い糸＜後編＞（後書き）

自分の中で色々なパターンがめぐってしまつて、なんか付け焼刃的になつてしまいました。読み苦しい点があるかもしれませんが、お許しください。

とりあえず、色々なパターンに関しては、今後別のお話の中で展開するつもりです。

ようやく【ろまんす】もこれで完結です。

そして、恋愛アプリの二次創作もこれで完結です。

【初恋くTomomitsu Sideく】、【ハツコイく姫SIDEく】、【ろまんす】と3作品続けてお付き合いくださいまして、本当にありがとうございます。

拙い文章、乏しい表現力の中でなんとか私らしい物語がお伝え出来たならば嬉しいのですが。

そして、ご感想などお聞かせ願えたらとても嬉しく思います。

また、ご縁がございまして、作品を通してお会い出来ることを楽しみにしております。

皆様にとって良き時が過ぎてゆきます事を願って……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860/>

ろまんす

2011年9月12日11時16分発行